機能訓練と生活訓練のプログラムを再編し
一体的な運営を目指した取り組みについて

かがわ総合リハビリテーション成人支援施設　作業療法士　矢野 立
サービス管理責任者　上川 毅、舘野 剛志

キーワード：生活訓練、機能訓練、自立訓練、一体化、見直し、業務整理

要　旨

かがわ総合リハビリテーション成人支援施設では、機能訓練、生活訓練、就労移行支援事業を提供している。このたびニーズや能力、状態に応じたサービスを提供できるよう、機能訓練と生活訓練のプログラムを自立訓練プログラムとして再編し、一体的な運用を目指した取り組みを行った。結果、実施プログラムを見直し、利用者にとって自分のニーズや状態に応じたプログラムが選択できるようになった。またプログラム実施担当が事業の枠を越えて流動的に人員配置ができるようになり、実施職員数が少なくてもプログラムの実施数を確保することができた。加えて、プログラムを一体化するにあたり全員でその方針を確認することで、プログラムの目的や内容などを意識、共有することができた。

1. はじめに

かがわ総合リハビリテーション成人支援施設では障害者自立支援法に基づき、身体障害者への機能訓練事業、高次脳機能障害者・発達障害者への生活訓練事業、障害種別に関係なく一般就労を目指す就労移行支援事業を提供している。このたびニーズや能力、状態に応じたサービスを提供できるよう、機能訓練と生活訓練のプログラムを自立訓練プログラムとして再編し、一体的な運用を目指した取り組みを行ったので報告する。

2. 倫理的配慮

本報告は当該倫理委員会の審査を受け承認を得た。また開示すべき利益相反関係にある企業はない。

3. 実施背景

同一施設内でプログラムを提供しているのにも関わらず、機能訓練、生活訓練の事業や職員間で連携がなく、高次脳機能障害など同じ課題を持つ利用者がいてもバラバラにプログラムを提供してきた。それにより

（1）事業種別に捕らわれない課題により適したプログラムの提供

（2）そのための職員の業務内容の整理

が施設の大きな課題として上げられた。そのため先進的な動きをしていた他施設を参考に検討を行い、機能訓練、生活訓練の一体的な運用に取り組んだ。

4. 課題と目的

今回の取り組み以前は、機能訓練は身体障害の改善や社会生活力の向上を念頭においたプログラム、生活訓練は高次脳機能障害の改善や対応を念頭においたプログラムを中心に実施しており、事業ごとに対応する職員も固定されていた。（表 1）取り組み以前のプログラムの課題としては、

（A）事業ごとに主となる対象者像が異なるが、一方では高次脳機能障害のように共通した課題を持つ利用者がいるため、事業ごとに別々にプログラムを提供する方法では必ずしも適したプログラムが提供できているわけではないこと

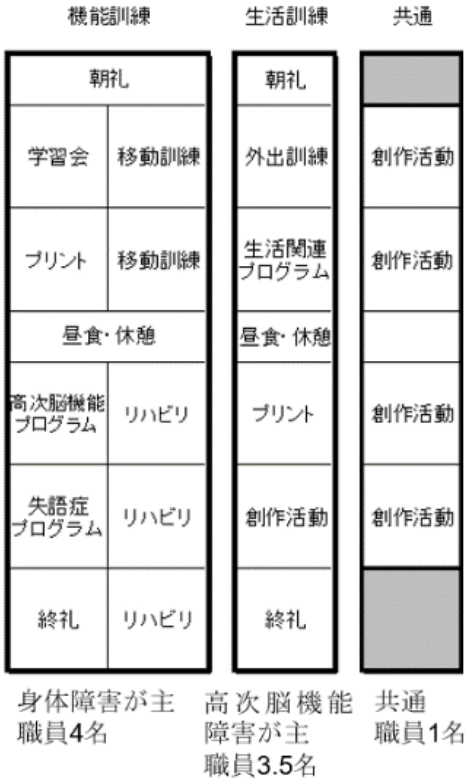
（B）ケース支援を担当する職員が日中のプログラムも携わる業務体制のため、個別支援や家庭訪問、

施設見学などの時間の確保に苦慮していたことや、日替わりでプログラムを担当することから、プログラム内容の連続性の確保が難しい状況があった。そのため、

（A’）機能訓練、生活訓練のプログラムを一体化し自立訓練プログラムとして実施することで、ニーズや利用者の状態に応じたプログラムが利用できる仕組みを作ること

（B’）日中のプログラムを実施する担当と個別的なケース支援を行う担当とで業務内容を分けて整理することで効率的な支援をすること

を目的として取り組みを始めた。



（表 1）取り組み以前の時間割例

5. 取り組み内容

（A’）の仕組みを作るための実施プログラムの見直しにあたっては、以前にも効果の得られるプログラム内容を検討し、グループ単位での実施や、退所後の生活を踏まえた内容としていたが、人員数や職員間の能力差などにより十分とは言えなかった。そのため改めて、

・グループで行い、その効果が得られる内容であること

・退所後の生活や社会参加を見越して、社会生活力の向上を意図すること

・疾病割合が多い高次脳機能障害の訓練や、利用終了後の必要性が高い移動能力に関する訓練は、細かく分けることでステップアップしていける編成にすること

・自主トレを促すプログラムも実施すること

などを踏まえ、事業や障害の種別ではなく、ニーズや状態によってプログラムを実施できることを意識して変更を加えた。

（B’）の業務の整理は、職員をプログラム実施担当とケース支援担当とで役割を明確に分け、

・プログラム実施担当の業務は日中のプログラムの実施や進行が主であり、毎日一定数の職員を確保することで、プログラムに対して必ず職員が配置できるようにすること

・プログラムは並行して行い、人員配置を工夫することでプログラムの実施数が確保できるようにすること

・ケース支援担当は担当ケースの個別支援と、利用終了間近でのグループワークを行い、プログラムの実施には基本的には携わらないこと

とし、それぞれの業務に専念できるようにした。

6. 成果

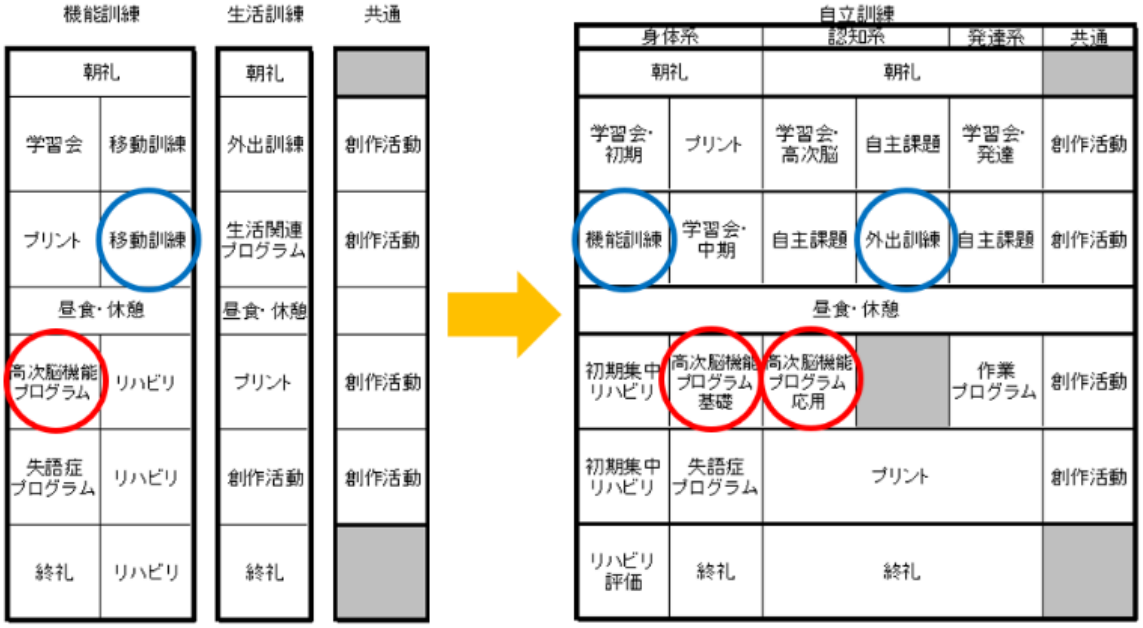
（A’）実施プログラムの見直しでは、プログラムの内容を段階づけすることができた。それにより移動能力に関係する訓練が身体状況に合わせて負担を選べるようになったり、高次脳機能のプログラムが自身の能力に合わせて選択できるようになったりと、利用者にとって自分のニーズや状態に応じたプログラムが選択できるようになった。（表 2）

加えて、プログラム実施担当が事業の枠を越えて流動的に人員配置ができるようになったことで、ケース支援担当が参加しなくてもプログラムの実施数を確保することができた。（表 3）

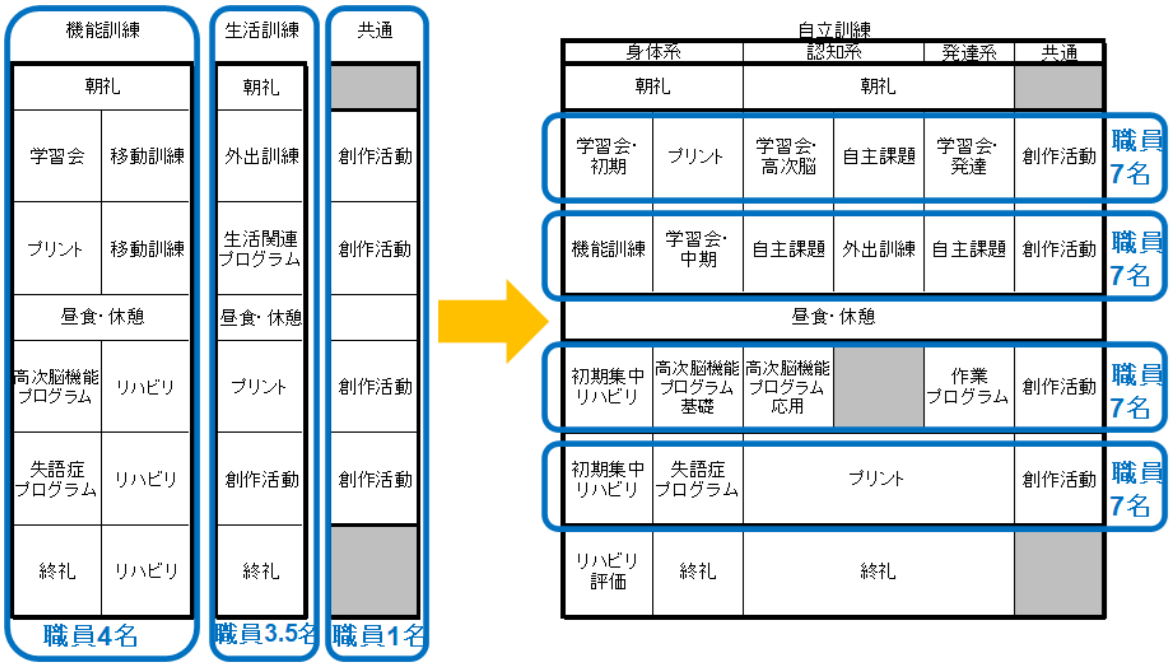
（B’）業務体制の整理では、プログラム実施担当はプログラムを一体化するにあたり、全員でその方針を確認することで、プログラムの目的や内容などを意識、共有することができた。そして人員配置を流動化したことで、今まで参加できていなかったプ

ログラムを経験することができ、幅広くプログラムに対応できる能力を身につけるきっかけになった。また、ケース支援担当の役割とプログラム実施担当の役割を明確化したことで専門性や連続性をもった内容のプログラムの実施を行うこともできた。またプログラムでの利用者の反応を多職種の職員が観察できることで、それぞれの専門分野を活かした意見交換ができるようになった。

ケース支援担当はプログラムの実施から外れることで、個別支援に当てられる時間が確保しやすくなった。そのため見通しを持って支援計画を立てやすくなり、家庭復帰前の模擬生活体験や自動車運転への挑戦など、今まで以上に取り組みを充実させることができるようになった。



（表 2）プログラムの選択例



（表 3）流動的な人員配置例

7. 事例

A さん 63 歳、1 年半前に脳梗塞を発症した。下肢に多少のふらつきはあるが大きな身体障害はなし。高次脳機能障害として注意障害は残っている。ADL は調理以外は自立しており、アパートで独り暮らし、家の中では大きな不自由はなし。そのため退院後に生活訓練で契約し利用を開始した。しかし実際は玄関周囲で転倒を繰り返す、ふらつきから外

での活動には不安がある、活動による疲労度が大きいといった課題が見つかり、取り組み以前の生活訓練のプログラムでは対応が難しいケースだった。

それに対し、取り組み後の一体化したプログラムでは高次脳機能のプログラムには参加しつつ、身体的な移動能力の訓練やリハビリにも参加することで、認知機能だけでなくバランスや歩行能力も向上を目指した。（表 4）さらに個別対応ではエルゴメーターでの自主トレを行ってもらい、体力の向上に努めてもらった。ケース支援担当は、これらのプログラムでの本人の身体的・心理的負担を把握し、無理が出ないように調整を行った。

また個別支援の時間調整がしやくすなったことから、家庭訪問を複数回行い、転倒場所の把握や動作指導、周辺状況の確認を行った。他のサービス提供事業所などと情報交換を行い、本人の現状が共有できるようにも努めた。

その結果、現在では自宅での転倒はほぼなくなり、会話をしながら歩けるほど体力も向上することがでた。他の利用者と一緒に自主トレを頑張ったり、エルゴメーターの使い方を教えている姿も見られ、交流も広がったように思える。現在は近所のコンビニへの買い物（日中の活動力の向上）を目標に、段差昇降や施設外歩行の訓練を行っている。将来は併設の福祉センターの活動にも参加してもらえるように支援を行っている。

8. 今後の課題

プログラム実施担当が行うプログラムは、身体的リハビリと創作活動の 2 つのプログラム以外はすべてグループでの活動提供である。そのことで利用者によってはストレスを溜め易い状況に陥ったり、参加そのものを拒否するなど、プログラムにうまく適応できない利用者もいる。そのためケース支援担当による、より時間をかけた個別的な関わりが必要とされる。また見学時の説明や体験利用などで、事前にプログラムへの理解を深める工夫も必要と思われる。

業務整理では、プログラム実施担当とケース支援担当の情報共有がうまくできていないことが主な課題である。特にケース支援担当は夜勤業務を兼務していることが多く、情報を把握するための時間が取りづらいのが現状である。話し合いの時間を定期的に確保するなど、お互いが情報発信をしあい、スムーズな支援体制を作っていく必要がある。

9. まとめ

- 機能訓練と生活訓練のプログラムを再編し一体的な運用を目指した取り組みを行った。
- 利用者にとって必要なプログラムが利用できる仕組みや職員の業務体制の整理を目的とした。
- 利用者はニーズや状況によってプログラムを実施できるようになった。
- グループでの訓練が中心となり、それによる成果と課題が現れた。
- 業務整理によって流動的な人員配置や個別支援の時間管理が容易になったが、情報共有などの課題が残された。

プログラムでは

自立訓練

身体系		認知系		発達系	共通
朝礼		朝礼			
学習会・初期	プリント	学習会・高次脳	自主課題	学習会・発達	創作活動
機能訓練	学習会・中期	自主課題	外出訓練	自主課題	創作活動
昼食・休憩					
初期集中リハビリ	高次脳機能プログラム基礎	高次脳機能プログラム応用		作業プログラム	創作活動
初期集中リハビリ	失語症プログラム	プリント			創作活動
リハビリ評価	終礼	終礼			

個別支援では

- ●本人の負担の把握
- ●転倒場所の把握と動作指導
- ●周辺状況の確認
- ●他サービス提供事業所などとの情報交換

（表 4）一体化したプログラムの実施例

【出典先】

令和元年度かがわ総合リハビリテーションセンター研究年報